

と強調しておきたい。その意味で、現在の〈様式〉の多くは【原様式】段階に止まるものと考える。

⑧ 【原様式】は認識の出発が固有の遺跡・固有の遺構であり、認識の範囲が周辺の遺跡群へと拡大されるなかで時間的・空間的にも拡大されて〈様式〉となる。そのとき、出発点である【原様式】と全く相同形としての〈様式〉が構成されることはない。遺跡から一步出れば、何等かの差異がついてまわることが普通であり、そうした差異をいかに統一的に説明できるかが現行における〈様式〉設定の根本にかかっている。つまり、少なくとも〈型式〉・〈形式〉レベルの差異が、しかも頻度的には低率に存在するのであり、そのような差異を内包する〈様式〉に至らなければならない。差異を除外するのでは、正しい〈様式〉とはいえないのではないか。

この点で、〈様式〉は「齊一性」を指導理念とすることにおいて、こうした問題を回避できたかにみえる。だが、それこそが〈様式〉のもつ限界であり、大きな問題である。〈様式〉は「齊一性」の指導理念によって保証されるどころか、それによって全く危険な領域に立つことになるのである。すなわち、境界問題が「齊一性」によって回避されてしまうのである。

⑨ 現在、〈様式〉は時間的区分としての「大別様式」「細別様式」、空間的区分としての「大様式」「小様式」が考えられているけれども、そもそも〈様式〉に内在する時間的性格・空間的性格からいってそうした使い分けはかえって混乱のもとになるのではないか。現状で考えられているような「細別様式」を包括するものとして「大別様式」があるようには、「小様式」を包括するようには「大様式」があるわけではないのである。大別・細別の議論においては時間性がただひとつの焦点になっているため、「大別様式」内部において並行するような複数の「細別様式」は考えられていないのだ。しかし、「大様式」と「小様式」の関係においては、「大様式」内部においての複数の「小様式」が並存することになるのであるから、指導理念である「齊一性」にもすでに重層性が考慮されていることになる。そうであれば、大別・細別という時間性において「齊一性」のみを指導理念とすることは問題があるのであり、当然多系統でなければならぬ。

現状では、「大別様式」「細別様式」とともにひとつの「齊一性」の指導理念のもとに一律の変化を仙るものとして扱われているため、説明上の齟齬は表面化していないようにみえる。だが、少なくとも「大別様式」に対応すると思われる「大様式」に時間的な困難が伴う以上、表裏一体であるはずの前者に困難の生じないはずはないと考える。

⑩ 私が考える〈様式〉は、残念ながらまだ形になってはいない。その構想はまだ始まったばかりである。したがって、批判のみでは片手落ちであるという非難が生じることであろう。しかし、それでも敢えて言うならば、現在の〈様式〉論が時間的・空間的な境界を単純化

したまま、本来的には存在するであろう境界の多様性と階層性を問題にしないまま進行していることに対しては強く疑問視せざるをえない。

予め閉じた内部においては精緻な分析を行うことも究極的に可能である。その意味で現在の〈様式〉論も極めて精緻な姿を現わしているといえよう。ところが、ひとたび外部との関係を問題にするなら、境界問題は避けて通ることはできない。なぜ内部として閉じることができるのであるのかを問題にすることは、かえって既に明らかになった「齊一性」において除外された多様な局面の重層的性格をも問題とすることができるだけではなく、微視的な追及と巨視的な追及の二つの方向が可能となる。外部はその外部の外へと、内部はその内部の内へと、視点の移動を行うことが必要なのである。それによつて、重層的な性格に対する理解と共に、〈様式〉が有する時間的性格から生じる動的側面をも多面的に理解することができるのではないか。

そうして初めて〈様式〉は、まさに生成発展するものとして、[分析概念] [操作概念]というレベルを超えて文化の意味を語る位置に到達するのではないか。

7. 鈴木敏則氏は、「共有型式」「専有型式」という概念を用いて、「様式」の空間的問題に対処しようとした。私はこの概念の有効性に注目して、「型式」という抽象概念から時間的・空間的性格を除き存在実態(単独性)に近い「器種」という用語に置き換えて、「共有器種」「専有器種」とした。そして、共有・専有に動的性格を持たせるために、〈過程〉を付与して、「共有化」「専有化」という概念をあわせて用いた。ただし、回本文での使用はあまり無い。

鈴木敏則 1987 「欠山様式とその前後」『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後研究・報告編』。

8. 財団法人愛知県教育サービスセンター 1984 『勝川』において、A類～E類まで区分した。今回との対応関係は、A系統—A類、B系統—B・E類、C系統—B・C類、D系統—A類、W系統—D類、となる。前回よりは境界の明確化に努めたつもりである。

9. 伊勢湾西岸部の弥生土器研究は、その独自性を追及するよりは畿内様式をスライドさせことが多い。しかし、集積された資料を観察すれば「東海的」という把握の不十分さは明らかである。今後の課題は多い。

10. 部分で全体を代表させるのは一般論としては無謀なことであるが、土器の場合は、完全な例が少ないこと、多くを分類しなくてはならないことから、個体差の出やすい部分に注目することになる。口縁部はその代表的部分であり、これまで多くの報告者がそうした立場を採用している。その意味では、分類基準の普遍性が結果的に形成されているとも言える。

11. 変化に敏感な部分とは通時的側面だけでなく共時的側面にもあるが、結果的には口縁部の特徴重視の分類となり、また壺と同様モード(差異の連続)の抽出と

その重視となった。

12. 高橋信明氏の 1982 「本文編 I」『朝日遺跡』の規定による。
13. 出現頻度は出土点数の比率が問題となるが、点数は絶対数が少ないので点数順位を重視することになった。
14. I-1 a 期は朝日遺跡や三の丸遺跡下層で良好な状態で出土している。将来、I 期を 3 区分したうちの I-1 期として独立させることができるかもしれない。
15. (中村友博 1982 「土器様式変化の一研究」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社) で櫛描紋の一元的波及における変化(粗雑化)を説明するために使用された用語。果たしてそうだろうか。
16. 習熟度には個体レベルと系統レベルがあるが、両者の統制の取れた集合が中村氏の言う「社会的習熟度」であろうか。
17. 本来は沈線櫛描併用紋となるが、言葉に違和感を覚えるので籠櫛併用紋とした。
18. 製作レベルでは流派的なものに対応し、使用レベルでは「意味」が異なるのであろうか。あるいは製作・使用において「意味」が異なるのであろうか。
19. 朝日式以来、壺は櫛(貝殻)描紋であるが、鉢のうち皿状の浅いものには研磨と磨線状の沈線紋が主に施される傾向にある。また、壺でも沈線紋のみからなるものがあり、紋様系列差が認められる。とくに、大地形壺は付加繩紋以外は沈線紋でしかも黒色研磨仕上げであり、ここで精製とした鉢と手法上も共通する。その意味では、これらは C 系統の精製土器群であると言えないこともないが、C 系統土器群の全容が明らかではない現在、両系統で共有された精製土器である可能性も考慮していちおう A 系統に含めておく。今後の検討課題である。
20. 近江地方では類似例がいくつか認められる。W 系統の波及経路からいって当然のことであろうが、今少し近江地方における資料集積を待つことにしたい。
21. 石黒立人・宮腰健司・安藤義弘 1984 「阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器についてー1」『埋蔵文化財発掘調査年報一昭和 58 年度』財団法人愛知県教育サービスセンター。
22. 台付甕については森泰道氏が考察を加えている。1989 「台付甕の出現」『古代文化』11 vol. 41 古代学会。本稿と重なる部分もある。
23. 「上げ底」のより進んだ形態としても把握することができる。あるいは、森氏も述べているように、W 系統土器の系譜に関わるものかもしれない。III-1 期の出土例が今後問題となる。
- こうした形態の類似例は中部瀬戸内地方でも認められる。とくに、四国愛媛県松山平野周辺では、報告書掲載の実測図から台付甕 Wa に酷似する例をピックアップすることはたやすい。時期的にも近接(若干先行するようである)しており、距離を意識させなければ単純に

関連づけてしまいそうである。類似した形態が何の脈絡もなく成立するのかどうかに関しては、伝播論に批判的部分があるからといって一概に多元的成立論を採用するわけにもいかない。伝播論的理解の成立する余地が否定されない限りは理解を並行的に行わなければならない。製作技法や W 系統土器の全体的様相を把握した上で結論を下すべきと考える。

とはいっても、台付甕 Wa の分布が尾張地方南部と伊勢地方北部の一角に限られていることは、現在の資料的制約が仮にあったとしても、本文に述べたように台付甕 A からの変換とは別系統であることを明らかにしていくように思う。したがって、III 期の文化要素全般が中部瀬戸内地方との強い関連を示していることを考慮するなら、たとえ甕体部内面ケズリの連鎖を陸上で追う限り現状で北回りが優勢になろうとも、W 系統土器が全体としては離散的な側面がある以上は構成部分の由来に関して海上経由のスポット的な展開も有り得るとしておく。

24. 本センターでは矢作川下流に位置する岡島遺跡の発掘調査をしており、そこでのありかたをみると、台付甕 A の出土は 10% 程度で量的に主体にはならないようである。調査担当池本正明主事の教示。

しかし、台付甕という形態が採用された背景に台付甕 A のある事は動かしようもなく、問題はなぜその情報が優位となったかである。特定の技術・形態の一体化した影響=共有化ではなく、抽象化された要素の共有化パターンとして評価する必要がある。

25. 森田克行 1989 「複合櫛描紋」『弥生文化の研究』10 雄山閣。

26. いちおう無頬壺や太頬壺が低頻度で共存するものの、組成がわかるような状況にないのは Cb 系統の主要分布圏である美濃地方でも同様である。Cb 系統分布圏では A 系統細頬壺や Ca 系統壺の出土することが知られているので、こうした組み合わせの存在することは確実である。この点に関して、製作レベルの〈孤立性〉と使用レベルの〈複合性〉は土器の移動とも絡んで区別する必要がある。いずれにしても、技術的に継承されるのは深鉢のみという特異な系統であり、製作基盤の同一性に基づく〈様式〉概念では理解できない。Cb 系統の分布範囲は、土器が交換財として流通する圏域(コミュニケーションシステム)として理解すべきであると考える。

そして、土器群としての在り方がこのように外的な補完関係による器種分化が基調で内的な器種分化が阻止されていることは、Cb 系統深鉢のみの存在形態もあり得ることも示しているので、農民の土器が器種分化するのであれば、器種分化しない土器は非農民の土器ということになる。あるいは、定着的集約農耕である水田ではなく、ノマディックな農耕(例えば焼畑耕作と狩猟・採集の組み合わせなど)が考えられよう。今後詰めていきたい。

27. 美濃加茂市教育委員会 1973 「牧野小山遺跡」。第 51 図 9、第 57 図 12。
28. 別稿では鏡像現象と呼んだ。反転関係は、岡島遺跡でみると III 期 W 系統タタキ甕にもある。また、時期は古くなるが条痕紋系土器のハネアゲ紋が北陸地方では反転している。直接的な情報伝達から、間接的な情報伝達（発信地からの後続する情報が途絶えた状態で旧情報が保持されていく情報伝達範囲の分化、在地の情報との干渉、など）による変化（コミュニケーションシステムの変動による規則のくずれ）によるものであろう。
29. 国下多美樹 1989「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』財団法人京都府埋蔵文化財センター。
30. 松本洋明 1985「弥生土器の考察—弥生時代中期の大和型の甕を中心として—」『末永先生米寿記念献呈論文集』。
- 甕 Da-β については松本氏の説明で了解できるが、波状紋を組み合わせる例については日本海側の地方における加飾甕の動向と切り離すことはできない。より広域的な視点を必要とする。この点は朝日式の成立及び貝田町式への移行の両時点にも関わることであり、ここでは扱わない。
31. 深沢芳樹氏のご教示による。それまでは畿内地方ばかり見ていた私も、資料に当たっていくうち納得する部分もあった。ただ、W 系統土器群としての組成パターンに関しては畿内周辺地域との関係は考慮せざるをえない。複合プロセスは極めて複雑であり、ここでは割愛した。今後の課題とする。註 23 参照。
32. 深沢芳樹「6 弥生時代の近畿」『岩波講座 日本考古学 5 文化と地域性』岩波書店。p 173~174 で「紋様と仕上げ方」の関係について重要な指摘がなされている。
33. 滋賀考古学研究会 1990「弥生時代の近江と周辺地域」『滋賀考古』第 3 号。
- 上記文献では幅広い貴重な意見が掲載されている。
34. 社会構成が二元化し、情報体系も二元化したならば、考古学的に把握できる情報の性格を考慮しないかぎり議論は発展しない。その意味でいえば、日常的な土器情報はその遺跡の日常性に関わるということで〈下部〉を構成することになる。となれば、〈非日常的な場〉における土器情報にどういった差があるかを把握することが重要となる。あるいは、〈日常的な場〉に混入した〈非日常的な場〉の情報をいかにうまく取り出すかである。
- この点では、一般に祭祀的といわれる遺物や墓制に関係する遺物についての詳細な研究が必要となる。もちろん、両者とも重層的であろうが。
- 情報の伝達に関しては註 38 を参照。
35. 変容と変換については、
- 小学館『日本国語大辞典』1986 によれば、
- 変容—「姿や形が変わること、または変えること。」
- 変換—「ある事柄・事態がそっくり別の事柄・事態

に変わること。また変えること。」

と説明されているが、とくに変換の場合は、岩波書店『広辞苑』1984 によれば、

「[数] 一つの座標系で表された空間の点の位置などを別の座標系で表しかえること。」

という説明もあって、これなど「座標系」を「技術的基盤」あるいは「全体的表現手法」（表現手法のシンタクス）とでも置き換えればわかり易い。

変容については、加納俊介氏が「文化変容」とのからみで問題にしている。「用語に関する 2・3 の問題」『第 3 回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後研究・報告編』1987。

ここでの議論においては以下の文献を参考にした。

田中良之 1982「磨消繩紋土器伝播のプロセス」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』

上野佳也 1980「情報の流れとしての繩紋土器型式の伝播」『民族学研究』44-4。

中山俊紀 1985「岡山県北部における“山陰系”土器の様相」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について・発表記録』第 18 回埋蔵分化財研究事務局。

36. こうした手法の部分的採用は、ある程度そうした手法の施される部位の共通性を前提にするようである。たとえば、口縁部への回転ヨコナデは壺に限定して採用されているのであって甕には見られない。W 系統甕は口唇部に刻みを施し回転ヨコナデは施していないので、在地の甕への手法の影響の生じる余地はないと考えられる。この点で参考になるのは北陸地方の戸木 B 式である。北陸地方の凹線紋系土器群は甕の凹線紋手法が顕著で、このことに対応して小松式系の甕は口縁部のヨコナデが顕著である。

37. 「系統」と「群」という視点は何も新しいものではなく、すでに紅村弘氏が 1956 年に「愛知県における前期弥生式土器と終末期繩紋式土器との関係—土器型式の分類とその編年一」『古代学研究』第十三号において「類」を用いた同様の方法を発表している。すなわち、貝田町式は第 1 類から第 3 類まで細分され、それぞれが組成をもつ。中村友博氏はこれを評して「型式と複数の型式の特定の複合体とを混同したもの」（1982 前掲書）として否定的だが、土器群の分類整理はこの方法が適しており、極めて実態的である。だから、逆に遺跡差に影響されやすいという側面がある。

紅村弘氏は組成差によって「～式」を設定することを提言しているが、資料の増加とともに差異も増えるから「～式」の乱立となる。この点に関して、境界設定が重要な問題として浮上してくるのであるが、こうしたことに対する前に紅村弘氏は土器研究を事実上中止してしまった。

38. 情報が伝わる時、そこには発信地と受信地が存在す

る。しかし、それはあくまで伝わった場合のことであって、伝わらなくては発信地はあっても受信地はない。

情報が伝わる場合、当然情報の伝達経路が存在する。けれども、伝達経路があっても回路が閉じていれば情報は伝達されない。だから、情報が伝達されたとは、つまり回路が開いていたということになる。ところが、回路が予め開設されていない場合も当然あるのであり、そうした場合には受信地の獲得と回路の開設が必要となる。

遠隔地の情報が距離を無視するほどの変形を受けずに伝達されることがある。ここで問題にしている凹線紋系土器がそれである。発信地からの距離はかなりある（もちろん、それでも空堀紋系土器や遠賀川系土器に比べれば伝達距離は短いのだけれども）。

こうした情報の伝達は、個別の部分であれば通常〈伝播〉として説明できる。しかし、体系的に伝達される場合は、なかなか説明は難しい。しかも、在地の伝統的部分を駆逐するのであるから普通ではない。この時期は、すでに領域設定による地域区分のある程度進行した段階であるからなおさらである。そうした状況で遠隔地間に回路が予め開設されていたとは考えられない。受信地及び回路を新しく設定しながらの情報伝達ではないかと考える。つまり、外的に強制的に受信地が設定され回路が開かれることによって、特定の情報が部分的にではなく体系的に伝達されるのである。このことは、受信地がそれ以前に固有の情報系を保持していればそれとの抵触をきたすから、それを排除する強力な力を伴うか、そうでなければ受信地側がすでにそうした固有の情報系を維持できなくなっている状況が背景にあることになる。

果たして、その具体相はいざれか。これが私の問題にしていることである。

39. 「地域性」については、諸要素の単なる地理的分布上の差異である〈地域差〉と混同した意見がまま見られる。〈地域差〉はある時間的位置における個々の文化要素あるいはその組み合わせの差であり、要するに表面的な差異が評価の基準である。しかし、「地域性」は単に地理的分布に関する文化要素の組み合わせだけにとどまらず、その組み合わせそのものに内的関連性があり、他とは異なる特性が持続されることにおいて認識される。この点では「文化変容」の在り方が「地域性」に関わってくる。同じ外的影響を受けながら、要素の選択あるいは変形の様態が他と異なるだけでなく、その内部ではある程度の〈同質性〉を保持しているとき、それが〈地域〉として把握され、その特性が「地域性」となる。つまり、人間の内的・外的行動様式の一定のパターンが閉じていることが必要である。したがって、「地域性」は初めに範囲があるのでなく、結果的に範囲が設定されるのであって、〈地域〉の認識そのものである。

40. 勧愛知県埋蔵文化センター 1988 『大渕遺跡、阿

弥陀寺遺跡』（愛知県埋蔵文化センター調査報告書第4集）。

41. 注 (1)に同じ

42. 勧愛知県埋蔵文化財センター 1988 『杉山遺跡』（同上第5集）。

43. 同上 1987 『土田遺跡』（同上第2集）。

文献

黒田吉益・諫訪兼位 1983 『偏光顕微鏡と岩石鉱物』 343 p。

森 勇一・永草康次・樋 真美子 1989 a 「尾張地方を中心とした土器胎土の特徴について」『町田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第9集） 44-49。

森 勇一・永草康次・樋 真美子 1989 b 「町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴」『町田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第9集） 50-53。

武田明正・塩谷 格 1979 「納所遺跡の出土植物」『三重県埋蔵文化財調査報告 35-2 納所遺跡』三重県教育委員会、15-49。

塩谷 格 1982 「朝日遺跡の炭化米」『朝日遺跡 I』 愛知県教育委員会 228-239。

松本 豪 1980 「瑞穂遺跡出土の種子類について」『瑞穂福岡市比恵台地遺跡』日本住宅公団、183-204。

佐藤敏也 1976 「板付遺跡出土の穀・炭化米などについて」『板付 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集』福岡市教育委員会、113-132。

第IV章

註

1. 環濠についての議論は、本論では事実関係とかなり限定した可能性の範囲における指摘にとどめ、とくに深く言及することはなかったが、このことは何も私の問題意識が欠如しているだけではない。環濠とそこから波及する〈団郭集落〉を問題にする場合、どうしても議論が広範に及ぶため、遺跡の位置付けの焦点が外れ易いので、敢えてここで立ち入らなかっただけである。

阿弥陀寺遺跡を集落論として論じる場合、形式的側面において〈団郭集落〉時と〈非団郭集落〉時の通時の比較は、弥生集落全般にも関わって少なからぬ価値を有していると私は考えているが、そうした議論を有効に進めるためには比較すべき他遺跡が用意されねばならない。ところが、現状において遠隔地に遺跡は存するものの、比較の〔場〕を共有すべき近接した遺跡には含まれていないのである。朝日遺跡は現在詳細に関して整理中であり、かつての予察的な整理には耐えても、より深い議論には不十分なのである。こうした事情において、課題は将来に責を果たすこととしたい。

2. 遺物・遺構の全体に関しては、以上報告した以外に『年報』掲載例のように、断片的ではあるが古墳・奈

良・平安・江戸各時代の資料がある。しかし、弥生時代、
鎌倉・室町時代などの内的連関は見せておらず、遺跡と

しての独立した性格は薄い。したがって、北東の土田遺
跡、南部の大渕遺跡とは不連続となるのである。

(補記) _____

変換についての要約

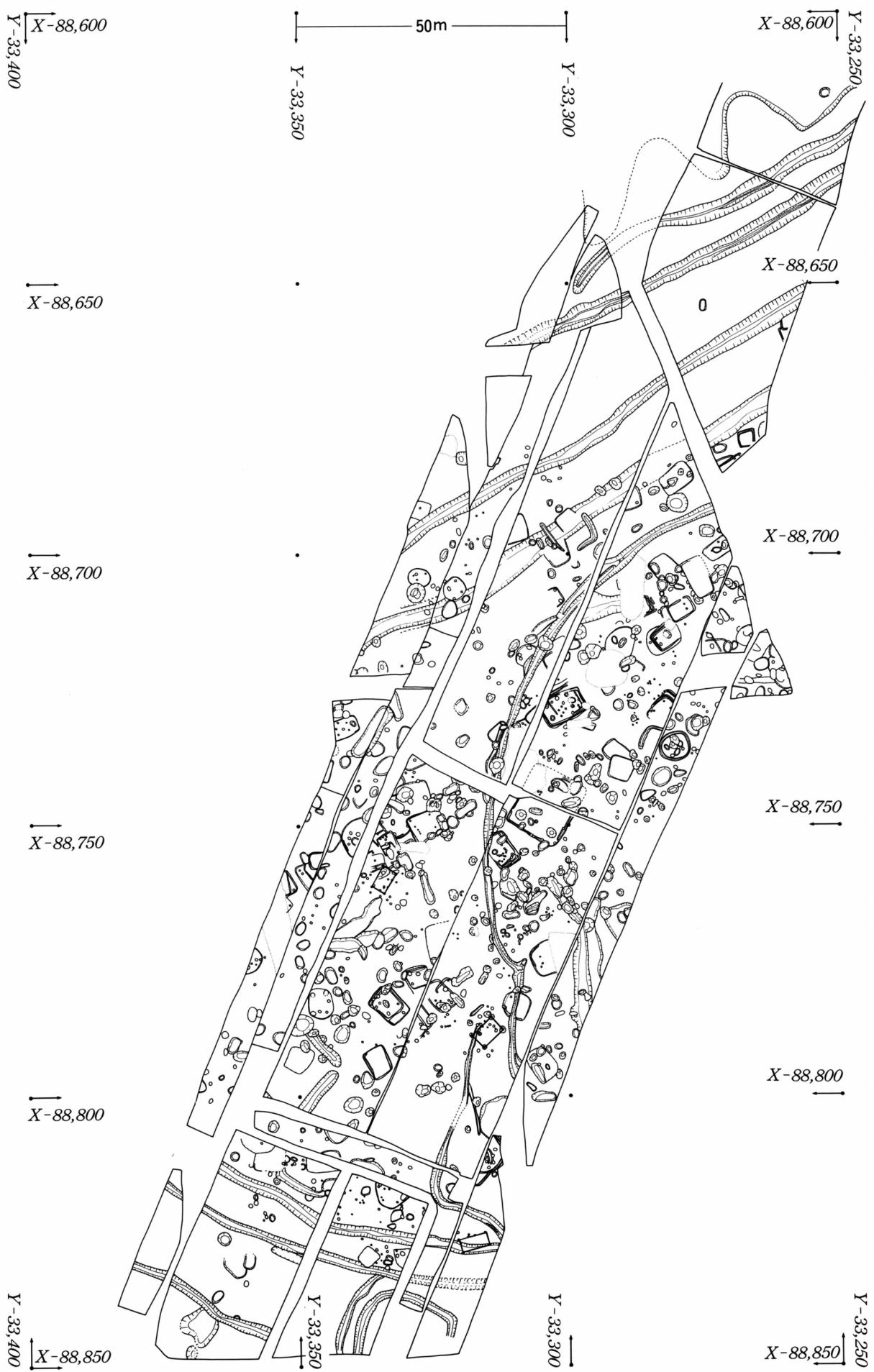
- ① 変換は異なる系統間における《全体的表現手法（表現のシンタックス）あるいは技術的基盤の転移（移動）》である。しかし、それは不十分な状態においてのみわれわれに把握できるのであり、変換が完全に終了してしまえがどちらかに帰属することになるから、段階的な移行にもとづく変換方向の推定は不可能となる。
- ② 模倣は変換において「志向性」を認めることが前提となる。志向性は、不易性の高い技術的側面とそれに比べて恣意性の高い表現的側面の比較によって識別することができる前者と後者の間に生じたズレであり、したがって対象を前提する意味において一定の方向を有するから、同様何ものかについて意識としての模倣とアナロジーとなる。
- ③ 変換を志向性によって区別すると、a. 技術的な転移はないまま他系統の表現を志向する、b. 技術的な転移にあって他系統の表現を志向する、の2類型に区分できる。そして、大略aは共時的に、bは通時的に現われる。
aは異なる系統間における相互作用であり、同化の傾向は示していないので、異化作用といえる。
bはある系統から他の系統へのまさに転移であって、通時的な差異の減少であるから同化作用である。
- ④ 変換を異化作用と同化作用の二つの側面から考えると、異なる系統間のある程度推測できる。すなわち、異化作用は基本的に両者が接触しつつある程度の均衡関係を保持している場合に認められ、同化作用は均衡がくずれたことによる従属的包括関係への移行によって生じる。
- ⑤ こうした視点で各系統の関係を考えると、伊勢湾地方の場合、I期はA系統・D系統が相似であり、A系統・B系統間に統合と反作用としての分岐傾向（異化作用）が認められる。C系統はCa系統は別にして、Cb系統・A系統間には異化作用も同化作用も認められず直接的な移動のみがあって、外部的である。II期はCa系統がA系統に統合されてすでに消滅している。Cb系統はA系統との間で異化作用が認められるが、分岐的にはA系統圏内でありA系統内部での異化作用である。Cb系統圏内では他系統への異化作用は生じていないようである。A系統・D系統間は相似のままである。III期はW系統も含めて全般的に異化作用が生じる。その後W系統と以外との間に従属的包括関係が成立して同化作用に転じる。しかし、台付甕については異化でも同化でもない、より根本的な変換過程（連続としての変換）がある。

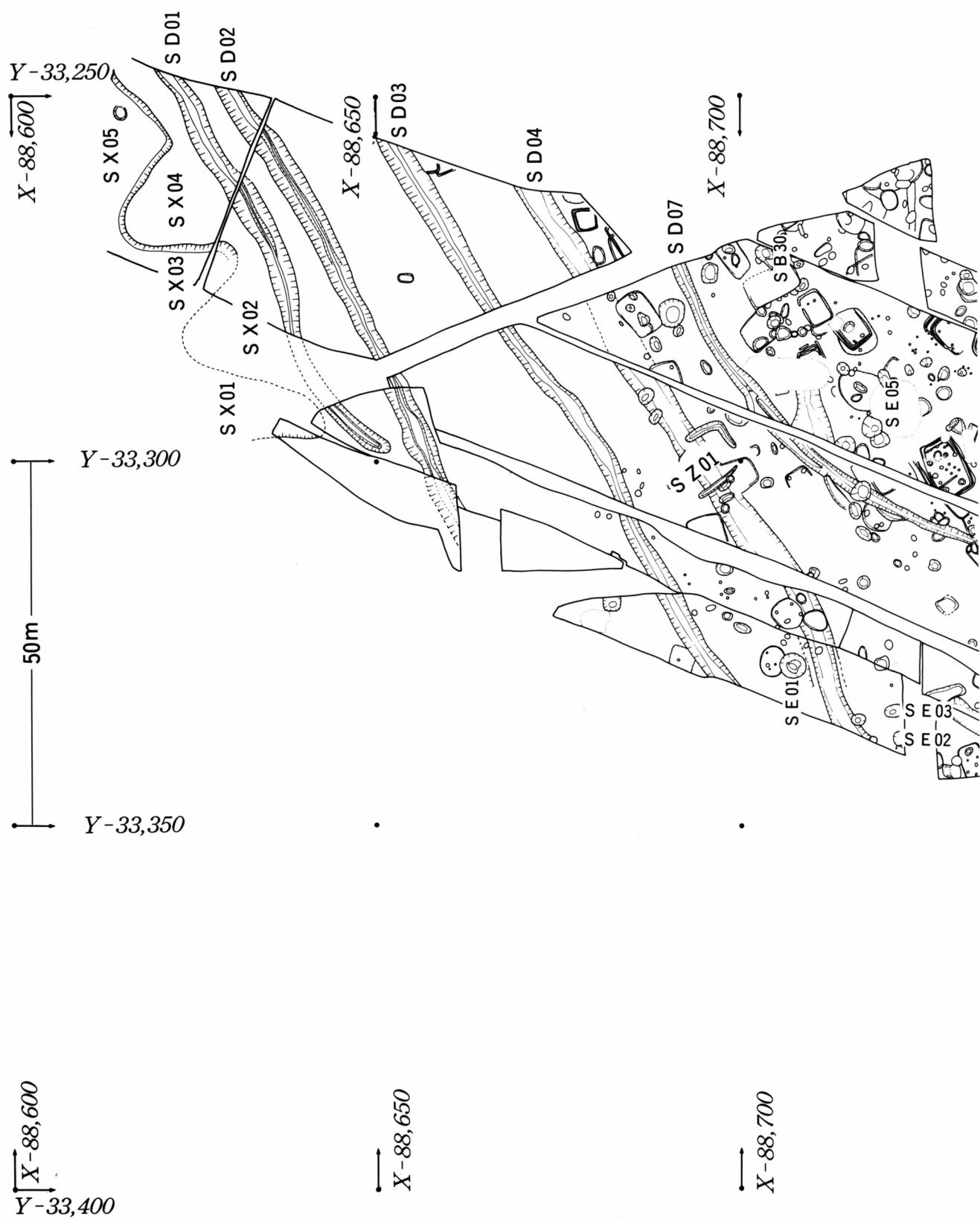
（石黒立人）

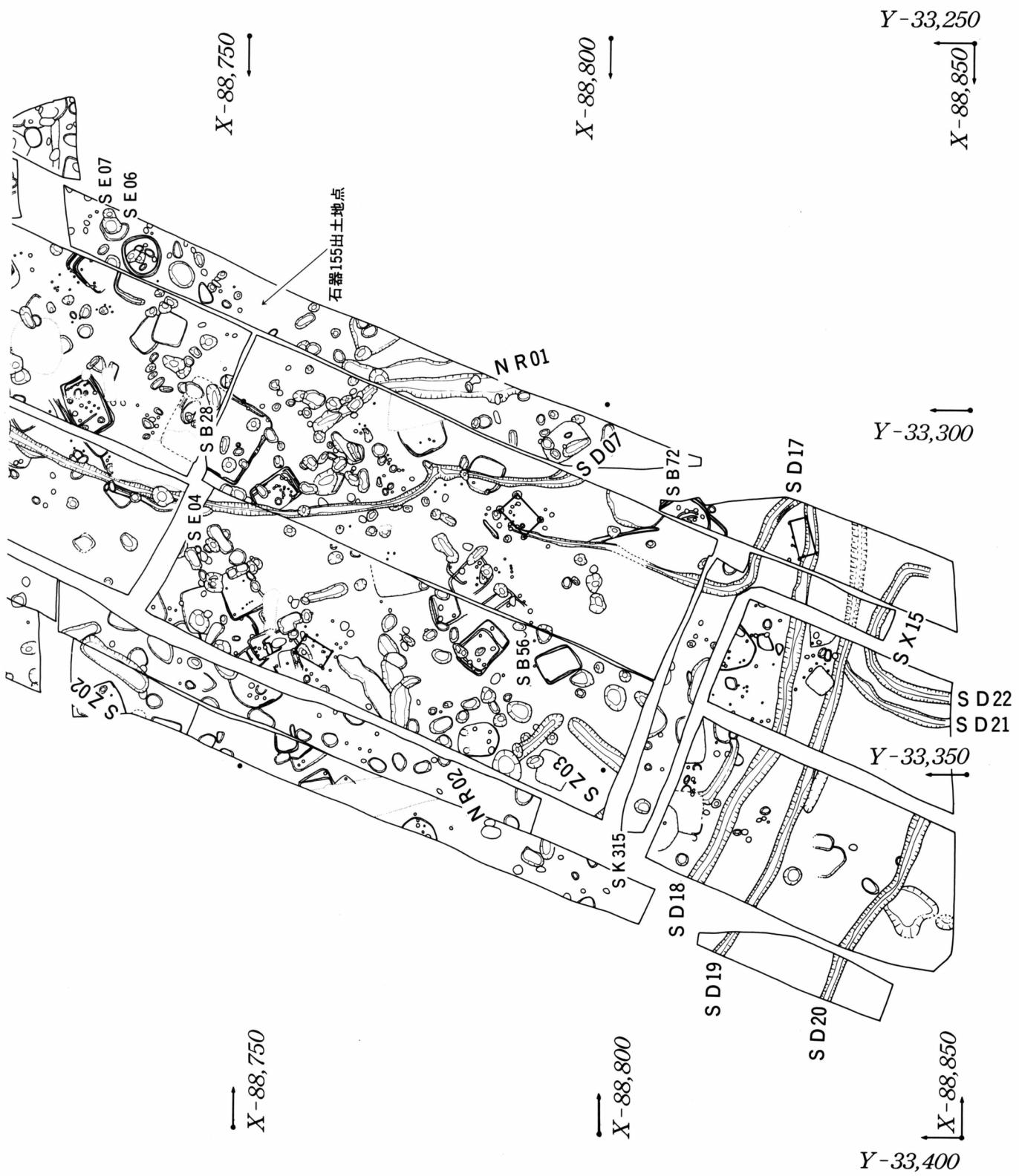
遺構図版

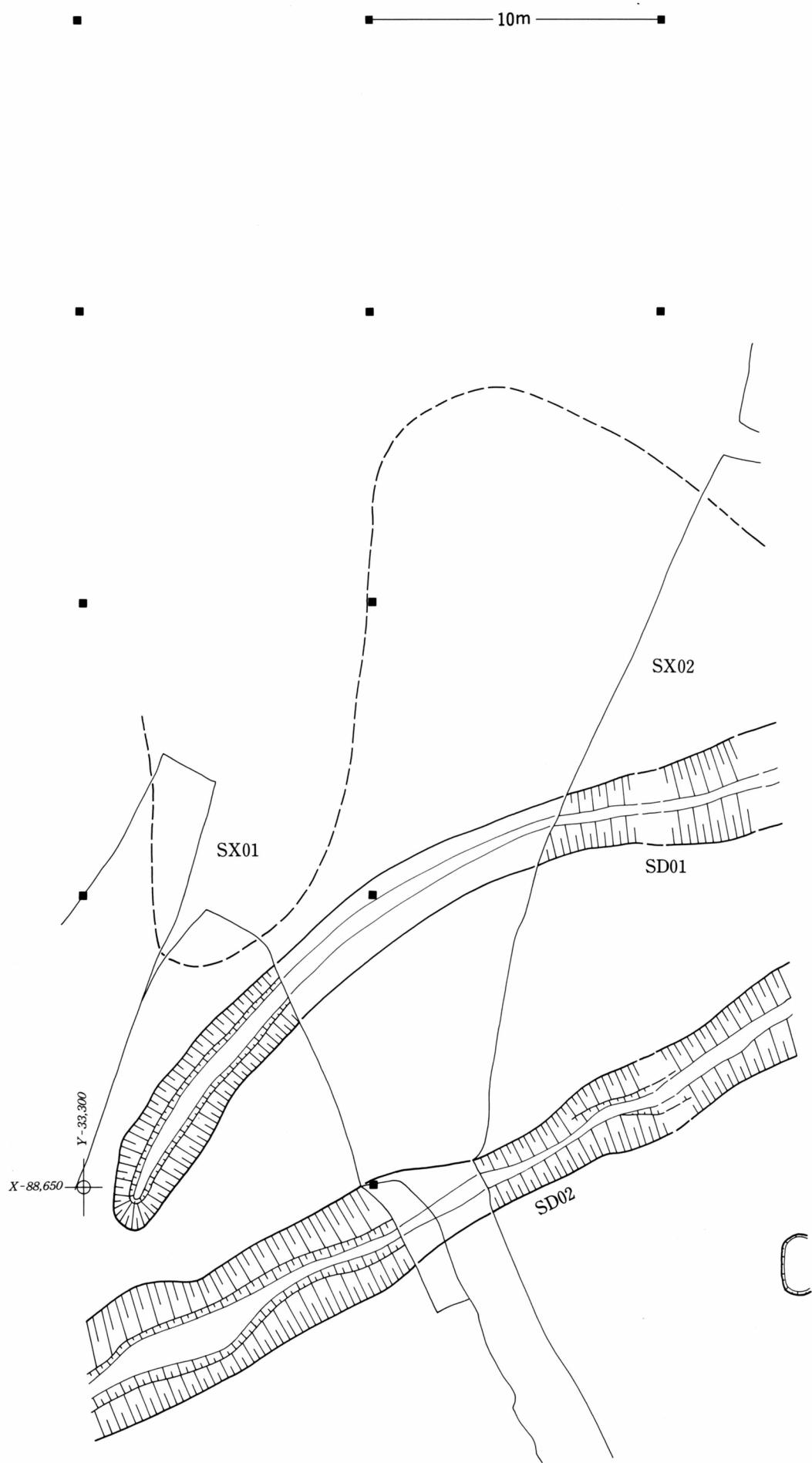
遺物図版

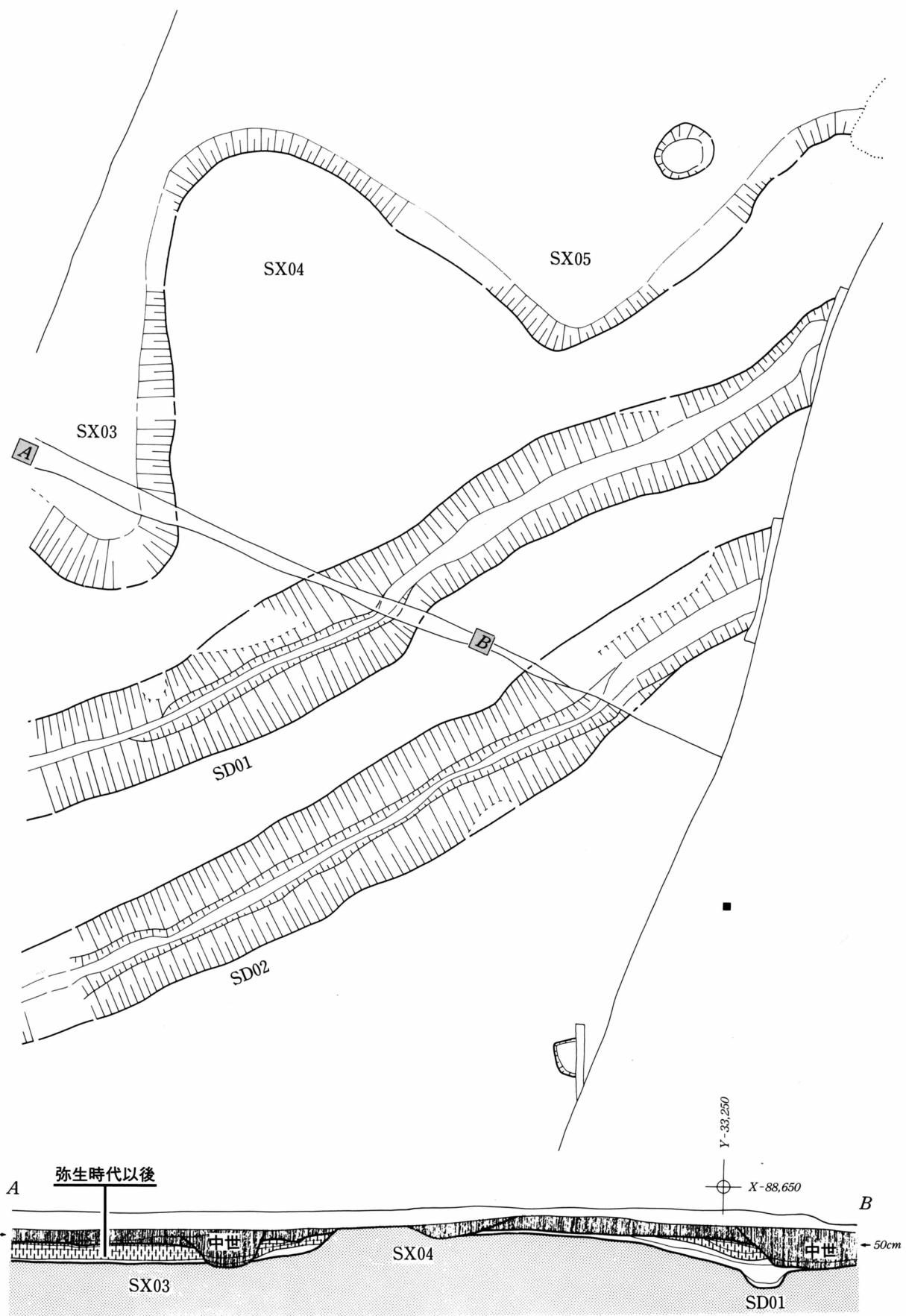
写真図版

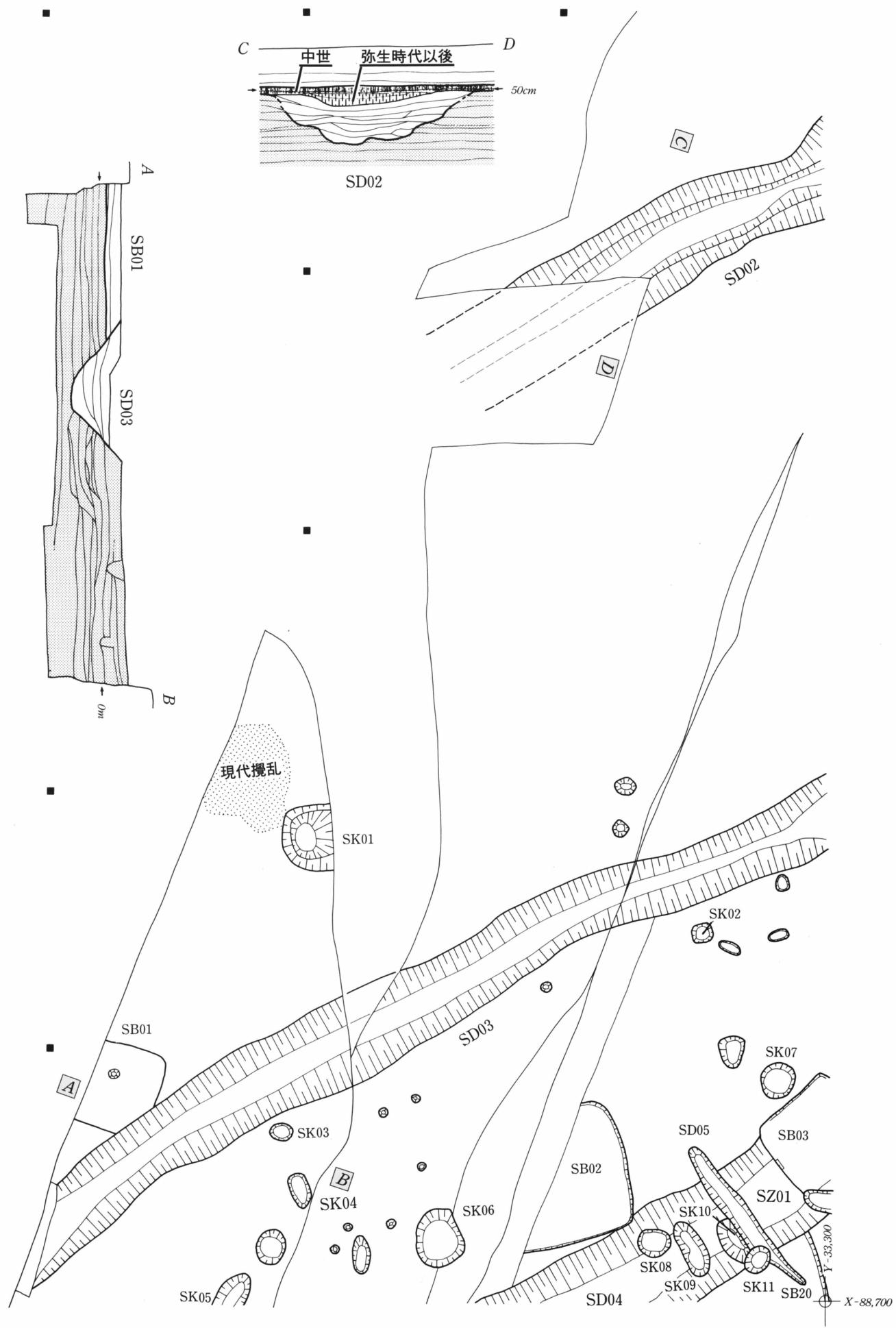


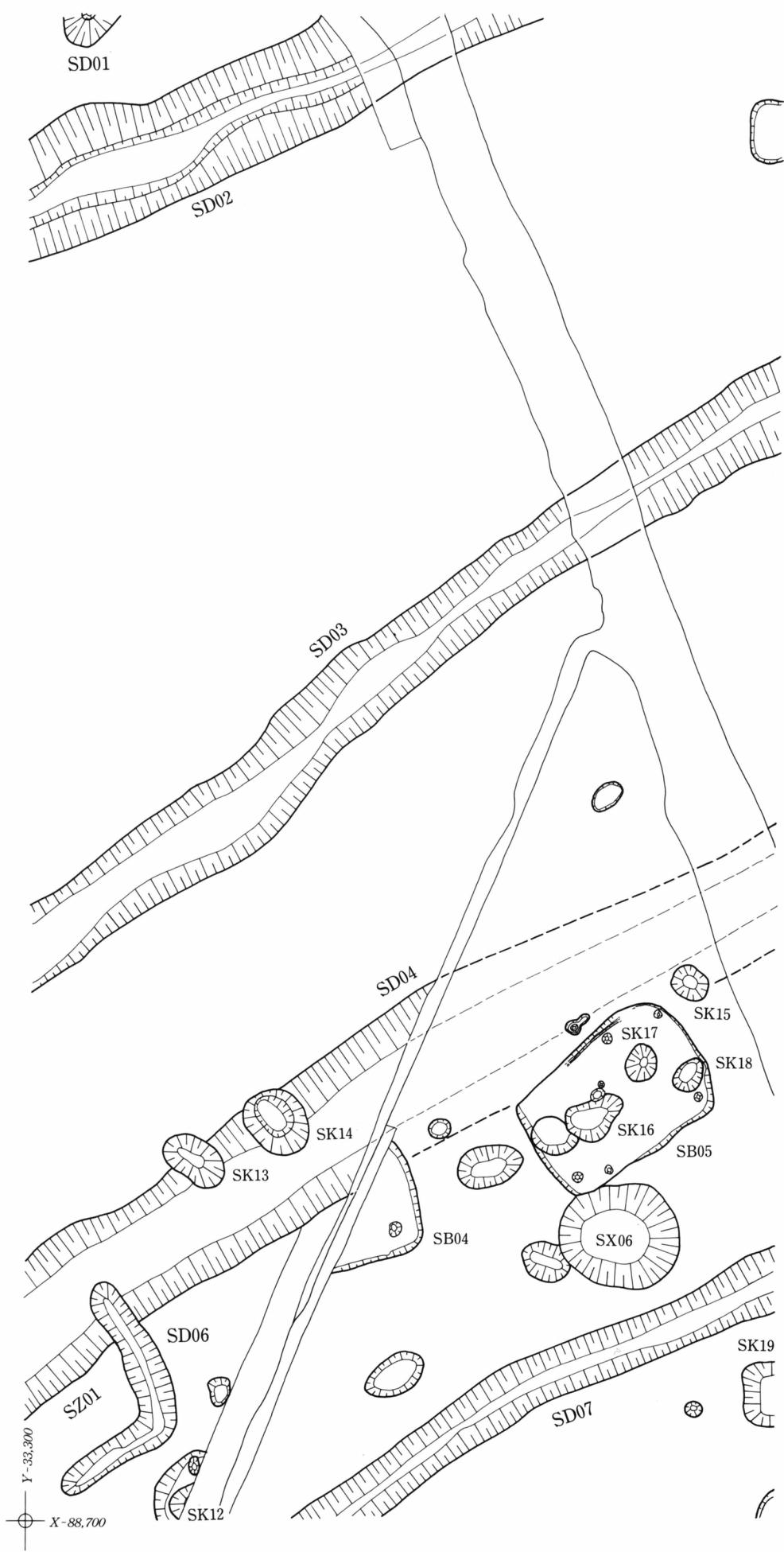


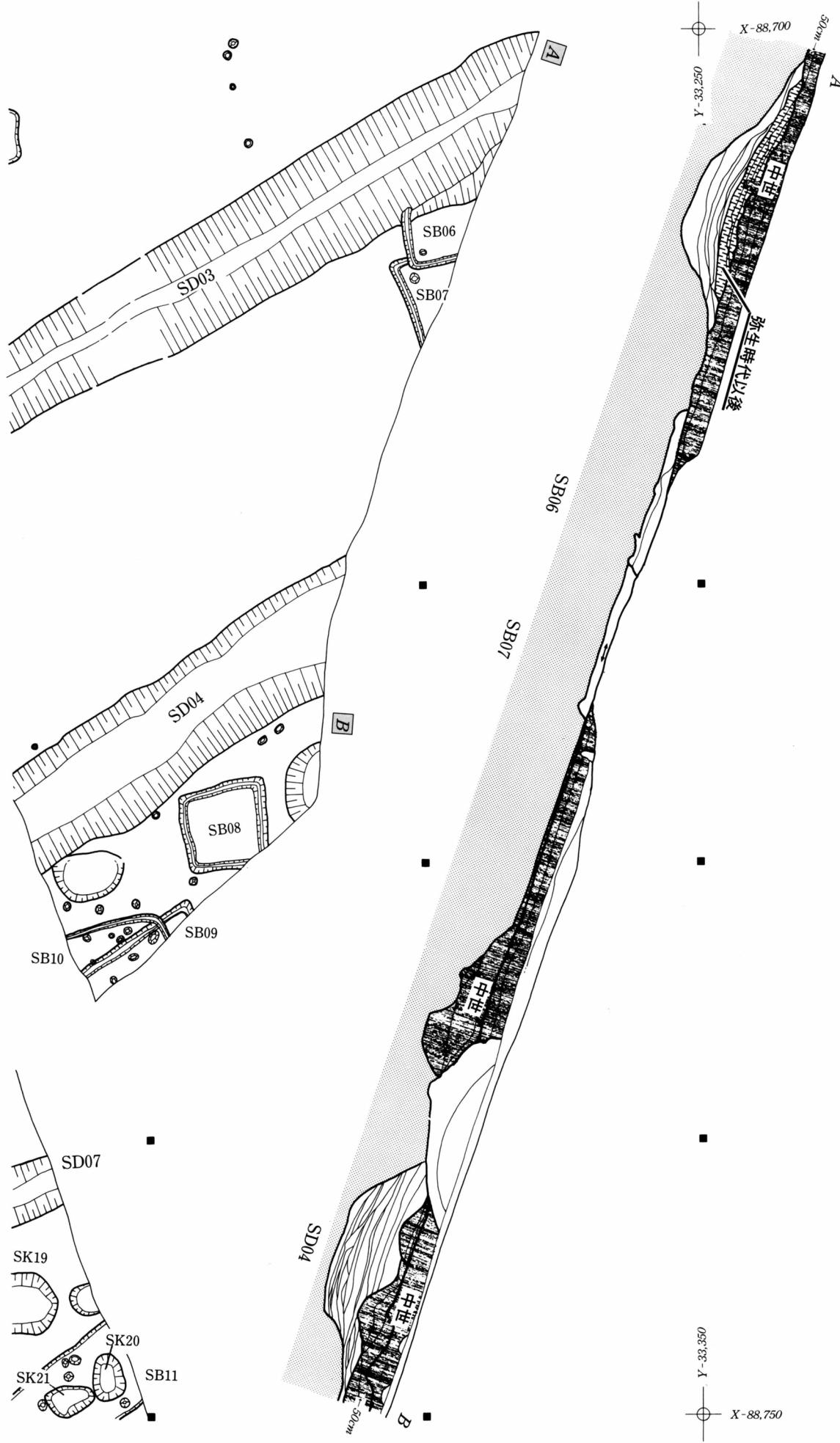


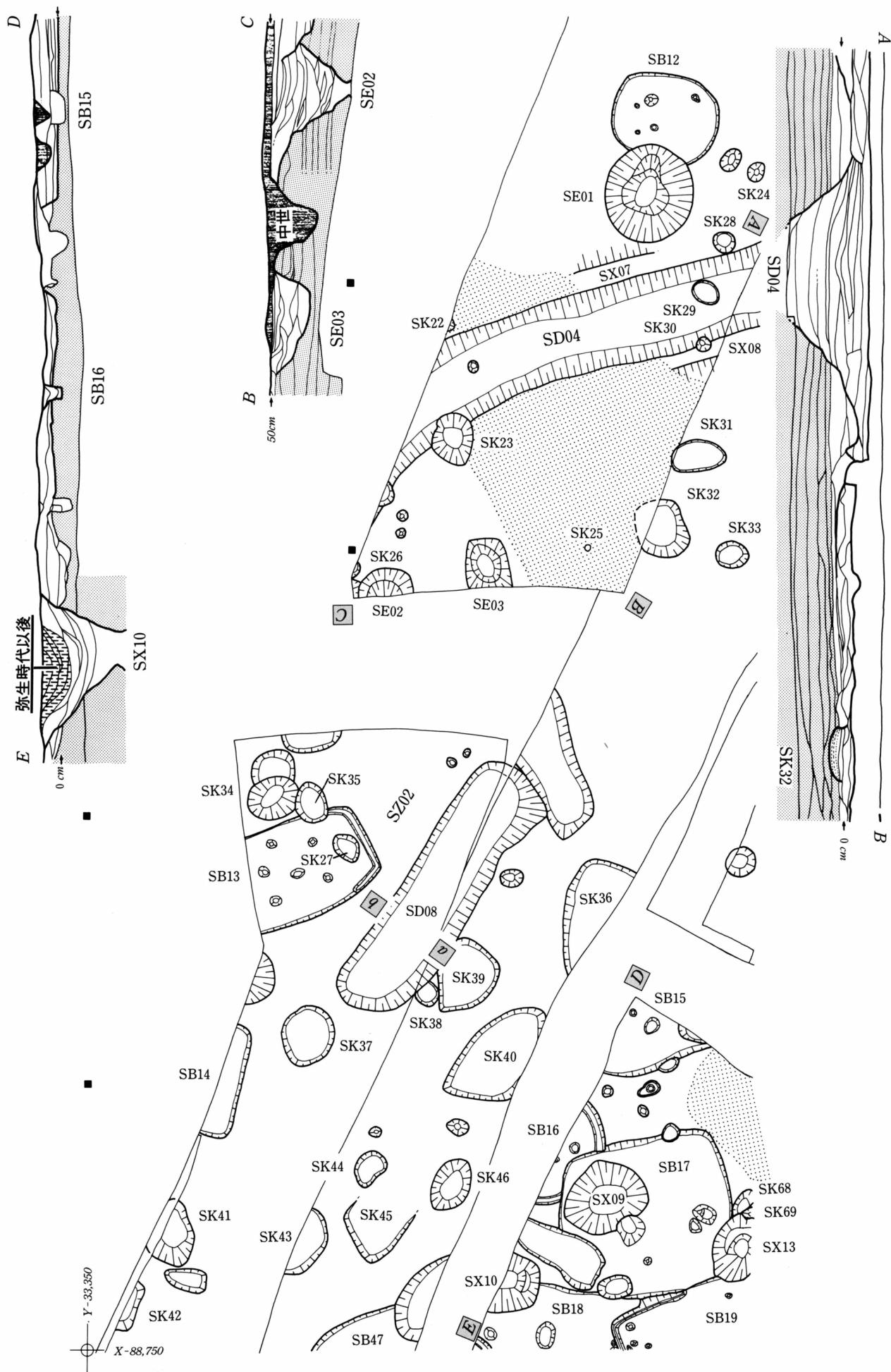


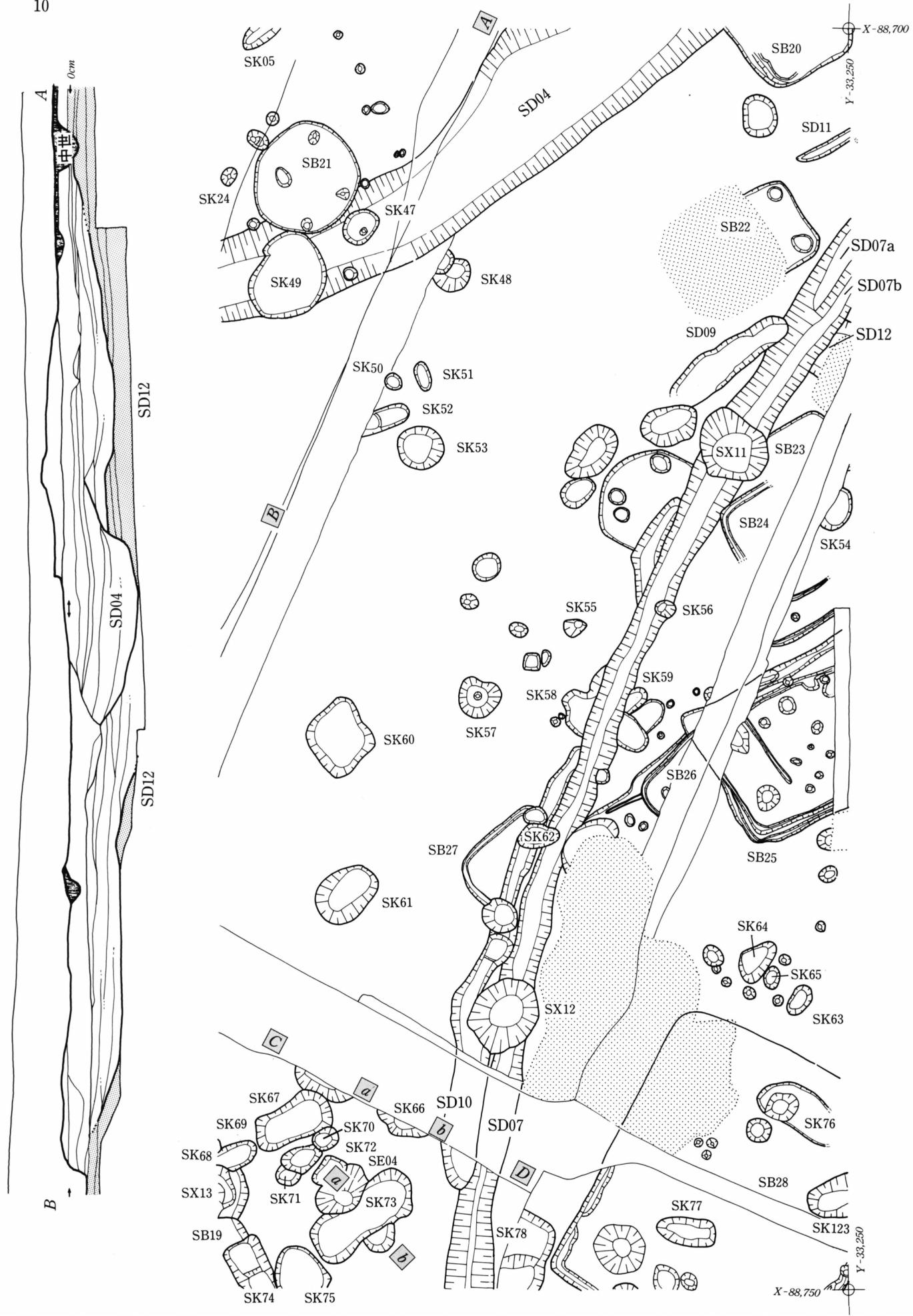


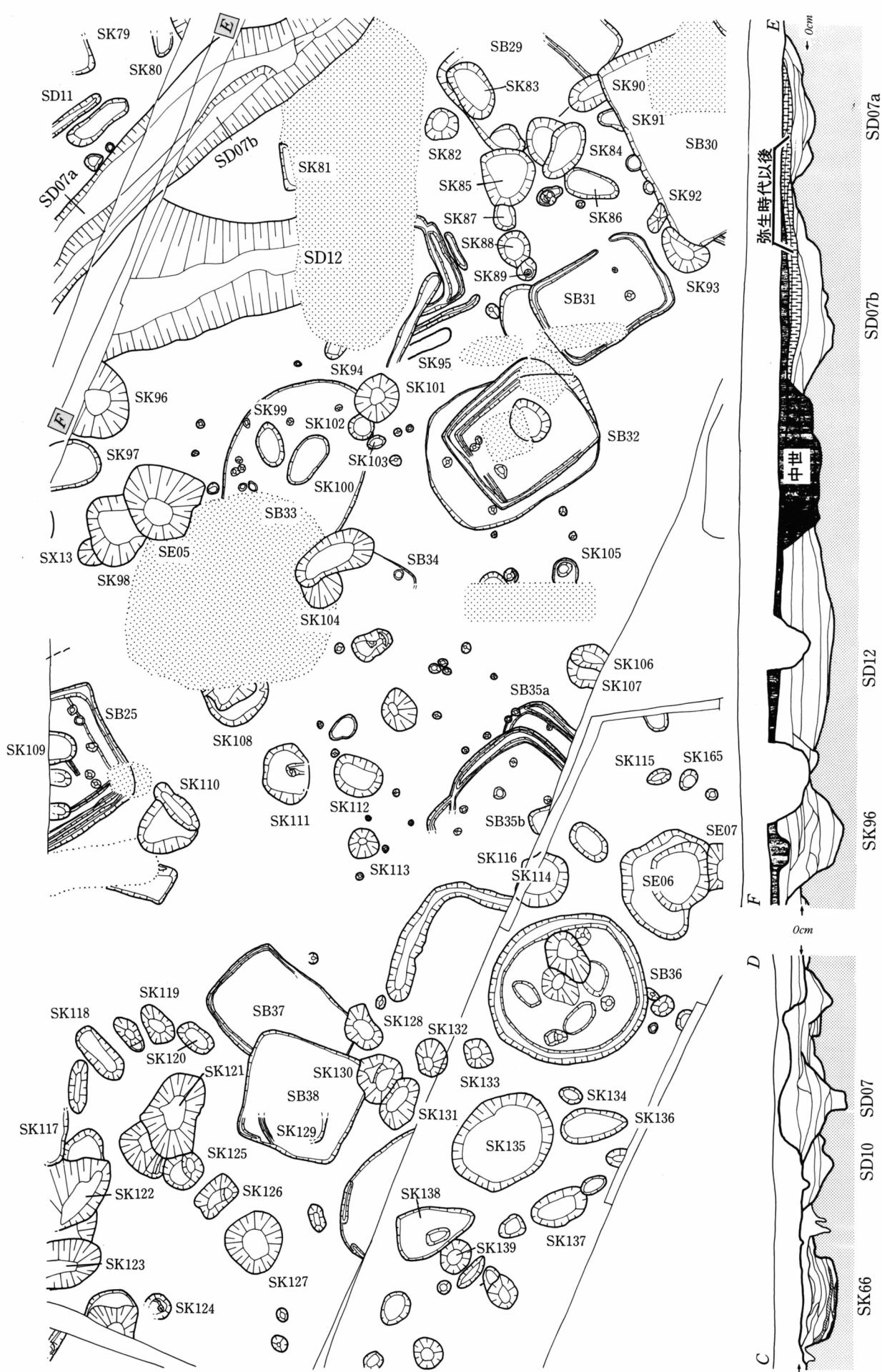


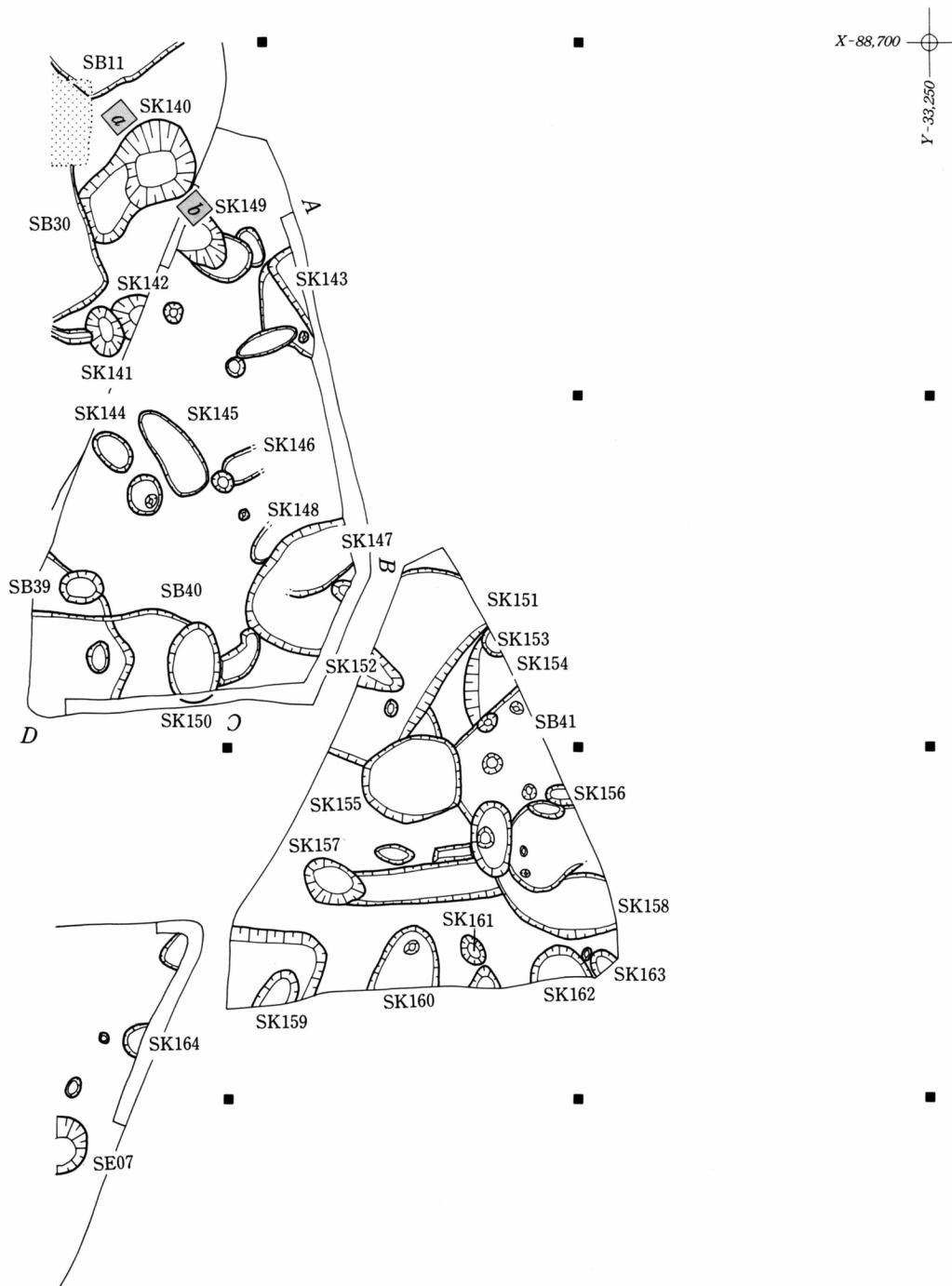












X-88,750
Y-33,250